

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02977

研究課題名(和文) 相談援助実習及び保育実習におけるeポートフォリオを活用した実習指導方法の構築

研究課題名(英文) Construction of practical training method using e-portfolio in social work field practical training and childcare field practical training

研究代表者

坂本 毅啓 (Sakamoto, Takeharu)

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号：30353048

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：ソーシャルワーカー・保育者の養成教育の実習教育に焦点化し、ICTを活用したeポートフォリオを中心とした教育プログラムを開発し、その効果を分析することを目的とした。2020年からの新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、当初想定していた通りには研究が進まなかったが、主に次のような研究成果を得た。実習記録の電子化などのICT活用における阻害要因を明らかにした。コロナ禍の影響も受けながらどのような教育実践・研究が行われたのかを学術的に整理した。Google Apps Scriptを活用した実習記録考察文作成支援システムを開発した。AIは初学者レベルの考察文を生成することができることを実証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、十分な研究蓄積が無かったICTを活用した養成教育の実践的研究と新たな知見を得ることができた点である。ICTを活用することでより専門的に考察が可能となること、文章生成AIをどのように実習教育に位置づけていくべきかを考える基礎的知見を得ることが特に評価できる。

社会的意義は、コロナ禍でのICT活用の代替実習や演習の教育実践に貢献することができた点が挙げられる。特に日本ソーシャルワーカー教育学校連盟が実施した調査研究事業にも関わることを通して、ICTを活用した場合でも教育の質が担保されることの実証にも貢献することができた。今後の養成教育にとって実用的な研究成果を得ることができたと言える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop an educational program centered on e-portfolios using ICT, focusing on practical training education in the training education of social workers and childcare workers, and to analyze its educational effects. Although we were unable to proceed with the research as initially envisioned due to the spread of new coronavirus infection from 2020, we were able to obtain the following main research results. (1) We clarified the disincentive for the use of ICT, such as the computerization of practice records. (2) Academically organized what kind of educational practices and research were conducted while also being affected by the coronary disaster. (3) We developed a support system for creating practice record discussion sentences using Google Apps Script. (4) Demonstrated that AI can generate a reflection text at the beginner's level.

研究分野：社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク教育 教育工学 eポートフォリオ 実習記録 ソーシャルワーク実習指導

1. 研究開始当初の背景

現代社会における少子高齢化に伴って、介護ニーズの増大とともに、子育て支援としての保育ニーズの増大がみられる。そのような中、福祉政策としては福祉・保育の人材(ソーシャルワーカー・保育者)をどのように確保すれば良いのか、特に介護人材と保育人材における人材確保難という状態であった。

そのような社会的状況の中で、情報通信技術(ICT)を活用したより効果的な教育プログラムを展開することを通して、より専門性の高いソーシャルワーカー・保育者の養成が求められていた。ソーシャルワーク教育団体連絡協議会は「新福祉ビジョン特別委員会」編による『ソーシャルワーカー養成教育の改革・改善の課題と論点<最終報告>』において、相談援助実習(現在のソーシャルワーク実習)において、「デジタルデバイスによる実習指導も巡回及び帰校日指導による指導に相当するものとして位置づけるべきである」と提起していた。

このような社会的必要性が高まっていたにもかかわらず、研究開始当初の時期に当たる2019年頃までは、現場実習におけるICT活用に関する実証的な研究は十分に行われているとは言い難かった。これは、eポートフォリオの活用が進んでいる教職課程領域における研究とは大きく異なっていた。ソーシャルワーカー・保育者養成教育の現場実習において、eポートフォリオを活用した教育プログラムを開発し、それが直接対面で行う巡回指導等と同じような教育効果があるのかを検証した研究は行われていなかった。

なお、本研究課題は2020年度の新型コロナウイルス感染症の拡大を受ける前から始めたテーマであり、上記の研究開始当初の背景は、研究期間1年目(2020年2月半ば頃)からは大きく状況は変化したことを、あえてここに記す。コロナ禍におけるICTを活用した養成教育が全国的に必要となり、その必要性や教育実践研究の在り方は研究期間2年目(2020年4月~)以降大きく変化した。したがって、後述の研究成果はコロナ禍に伴う社会変動の影響を大きく受けた。

2. 研究の目的

先述の学術的かつ社会的背景を踏まえ、ソーシャルワーカー・保育者養成教育の現場実習においてeポートフォリオを活用した教育プログラムとはどのようなものであり、どのような教育効果があるのかを明らかにすることを研究の目的とした。これは新規の領域を開拓し、より質の高いソーシャルワーカー・保育者を養成する教育プログラムの開発を目指すという点で、学術的独自性が高いと言える。

具体的には、実習現場においてeポートフォリオを導入するにあたっての解決すべき課題、eポートフォリオを活用した教育プログラム(実習指導方法)、開発した教育プログラムの教育効果、以上3点を明らかにすることが研究の目的である。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するために、目的 については実習教育に関わる関係者に調査を行う、目的 についてはeポートフォリオのソフトウェアを開発する、目的 については実習巡回指導や帰校日指導と同様の教育効果があるかを実習関係者(教員、指導者、学生)に対してインタビュー調査をする、以上の方法を用いることとした。しかし、2020年初頭からのコロナ禍の影響を受けて、先述の研究目的を維持しながら当初計画していた研究方法を若干変更した。

4. 研究成果

本研究課題における研究成果は次の通りである。

実習記録の電子化などのICT活用における阻害要因を明らかにした。

コロナ禍の影響も受けながらどのような教育実践・研究が行われたのかを学術的に整理した。

Google Apps Scriptを活用した実習記録考察文作成支援システムを開発した。

AIは初学者レベルの考察文を生成することができることを実証した。

1)研究成果 に該当する実習記録の電子化について、ソーシャルワーク学習者を中心に自由記述回答型のアンケートを実施した。収集

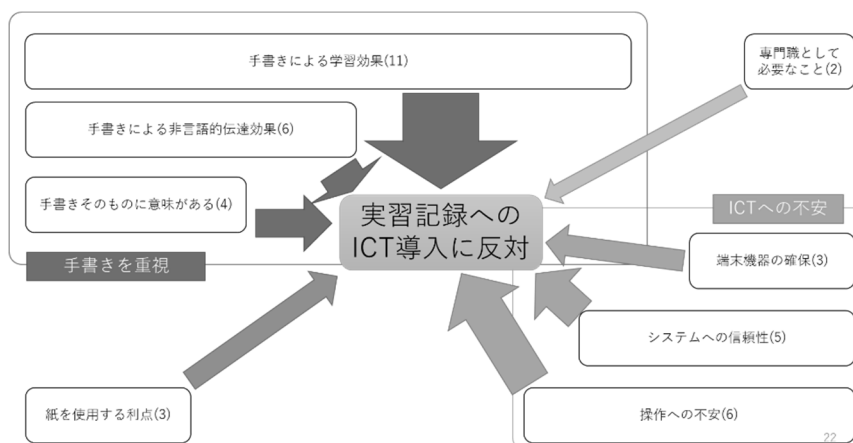


図 1 ICT導入に反対する理由

したデータから ICT 活用に反対する理由を分析して、ICT 活用における阻害要因を明らかにした。その結果が図 1 である。「手で文字を書くことの学習効果」や「非言語的に伝わること」等の手書きが持つ機能性への期待があり、実習記録を作成する教育目的を達成する上で必要な条件であるのかを今後検証する必要がある事が明らかとなった。

2) これに関連発展的に取り組んだ研究として、ソーシャルワーク教育における演習授業における ICT 活用を経験した学習者を対象に、教育効果と使用した感想に関する調査を行った。この調査結果(図 2)から、演習授業で ICT を活用したオンライン方式で行った場合、コミュニケーション面において学習者はデメリットを感じており、コミュニケーション面で充分に取り組めていないと感じ、

その結果対面方式を望ましいと考えるようになったことが分かった。オンライン方式で学ぶためには、この点をカバーする工夫が課題となると考えられる。

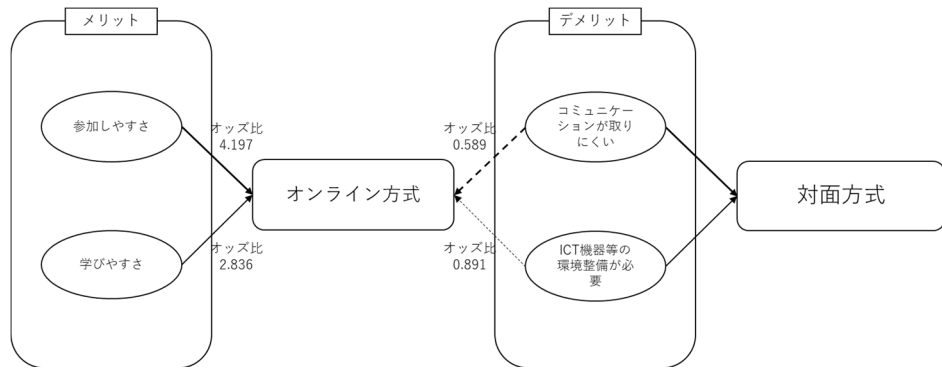


図 2 受講生の感じるメリット・デメリットと望ましい授業方法との関係

3) 研究成果

に該当するものとしては、ソーシャルワーク教育及び保育者養成教育において、コロナ禍の影響を受けながらどのような教育実践・研究が行われたのかを複数回レビューし続けたものがある。ソーシャルワーク教育においては、新型コロナウイルス感染拡大前までは、人と対面によるコミュニケーションに重きを置く学問領域のためか、ICT の活用事例はほとんど存在していない状態であった。しかし、感染拡大により、大学等が通常の教育を実施できなくなったことで、現在では、実習記録、遠隔地で実習する学生指導など広く受け入れられつつあり、前向きに教育 DX を推進している状況にある。このように、DX 化が着実に進んでいるものの、Puentedura (2010) の SAMR モデルでは、現時点はまだ Substitution (従来の教育ツールの代替) の状況と思われる。今後の研究課題として、ソーシャルワーク教育の DX 推進に関する調査・分析が求められており、他分野における教育 DX との違いを提示することが挙げられる。

保育者養成教育においては、実習記録の e ポートフォリオを活用することで、記録作成にかかる移管を客観的に測定できる、専門用語を適切に使用できているかどうかを客観的に示す、誤字脱字や語句の修正に時間を取られず、リフレクションに時間を費やすことができるといったメリットがあることを示した。

これらのレビューを通じた学術的整理は、ICT の活用が一気に進んだコロナ禍前から (2013 年から) ソーシャルワーカー・保育者養成教育における ICT 活用に関する研究に取り組んできた我々研究チームだからこそ得ることができた研究成果であると考えられる。

4) 研究成果 は、コロナ禍を受けて e ポートフォリオの導入の必要性が一気に高まったことで、大手のシステム開発会社が商品としてリリースしたことの影響を受けたものである。本研究課題では、当初、e ポートフォリオのシステムを開発し、教育プログラムとして実践した場合、どのような学びを得ることができるのかを明らかにする点にあった。しかし「先を越された」形で完成度の高いシステムがリリースされたことを受けて、そのシステムの根幹である実習日誌の考察文を作成する支援システムを開発することを発展的に目的とした。

開発には Google Apps Script を用いた。実習生が質問項目に回答する形で、実習日誌考察文が自動生成されて、実習生が入力時に登録したメールアドレスへ送信する流れとした。開発したシステムの入力画面については、図 3 の通りである。実際にソーシャルワーク教

実習日誌 考察文章作成支援

目的・概要

- このフォームは、実習日誌で考察の文章を書くことを支援することを目的としたものです。
- 自分のメールアドレスを入力することで、文章案を受け取ることができます。

留意点

- このシステムは学術研究の一環として作成しており、このフォームを活用して入力されたデータは、個人情報を取り除いて匿名化した上で、分析データとして利用することがあります。
- その際、個人が特定されることはありません。
- 利用したデータについて、消去を希望する(学術研究への活用をやめてほしい)場合は問い合わせフォームからお申し出いただくことで、データを削除いたします。
- フォームに入力する内容が無い場合は、「●●●●」などを仮に入力すると進むことができます。

権利関係

- このフォームのアイデアについては、坂本毅啓@北九州市立大学にあります。

Google にログインすると作業内容を保存できます。詳細

* 必須の質問です

メールアドレス*

メールアドレス

上記の留意事項を理解した上で利用する。*

理解し、合意の上で利用する。

図 3 入力画面

育の学生に対して試用してもらい評価してもらった。その結果、初学者で書き慣れていないと助かる、実習経験と専門的知識を結び付けることができる等の専門性の獲得に有効である等の評価が示された。一方でスマートフォンでは文字入力が煩わしい、作成された文章に違和感がある等の改善点が示された。

5) 研究成果 は、研究期間の終わり頃にリリースされた ChatGPT のサービスを受けて発展的に取り組んだ課題である。ソーシャルワーク教育(社会福祉士養成教育)におけるソーシャルワーク実習では、実習日誌(実習記録)の作成に取り組む。この実習日誌に書き込む考察文章について、AI が作成した文章と、学生が実習時に作成した文章を、それぞれ実習記録としての書き方・内容について評価したデータを収集した。分析をした結果、AI が作成した文章と学生が作成した文章では違いが見られず、同一レベルに達することが明らかになった。図 4 と 5 は、その分析結果である。

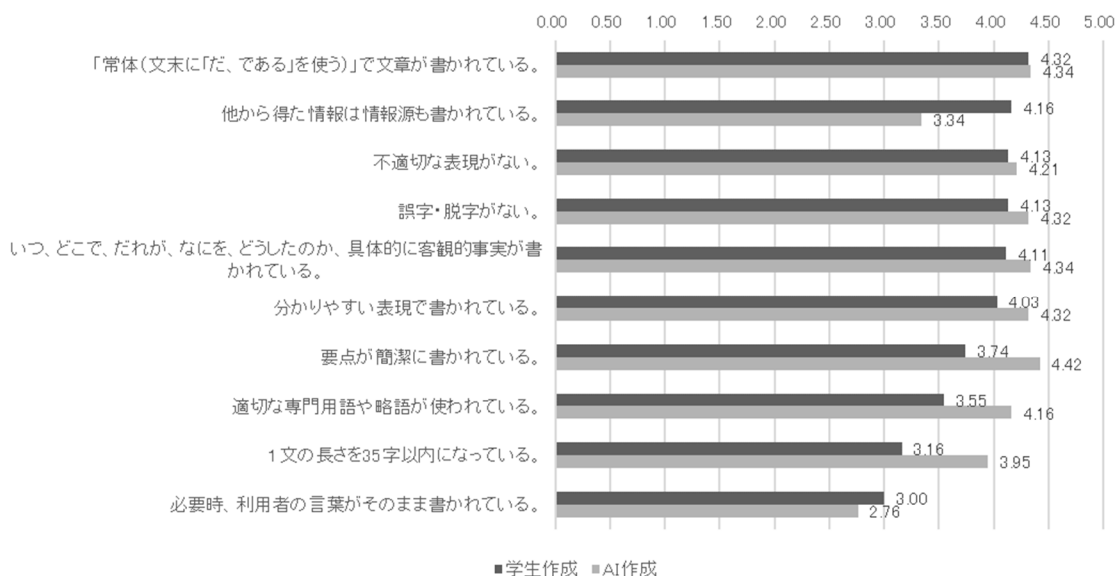


図 4 書き方に関する評価項目における学生作成と AI 作成の比較

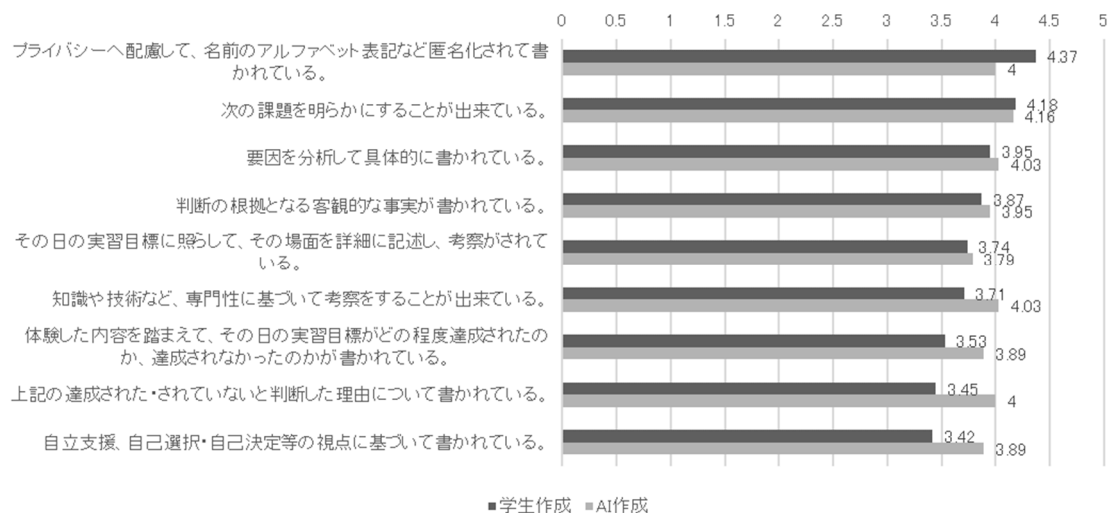


図 5 考察内容に関する評価項目における学生作成と AI 作成の比較

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 坂本毅啓・佐藤貴之・中原大介 | 4. 巻 23-9 |
| 2. 論文標題 実習記録のICT活用に反対する意見の検討 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 地域ケアリング | 6. 最初と最後の頁 52、55 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 坂本毅啓、佐藤貴之、中原大介 | 4. 巻 37-2 |
| 2. 論文標題 社会福祉士養成教育の相談援助演習におけるICT活用の成果と今後の課題 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 教育システム情報学会 2022年度第2回研究会 | 6. 最初と最後の頁 57、64 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 佐藤貴之・坂本毅啓 | 4. 巻 5 |
| 2. 論文標題 教育におけるデジタルトランスフォーメーション 新型コロナウイルス感染拡大における影響 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 地域創生学研究 | 6. 最初と最後の頁 1、11 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 中原大介・坂本毅啓・佐藤貴之 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 保育者養成教育におけるeポートフォリオ活用の可能性 実習記録に焦点を当てて | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 福祉健康科学研究 | 6. 最初と最後の頁 77、87 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 坂本毅啓 |
| 2. 発表標題 福祉専門職養成教育における実習及び実習指導でのICT活用に関する先行研究レビュー |
| 3. 学会等名 教育システム情報学会 第1回 研究報告 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 坂本毅啓・佐藤貴之・中原大介 |
| 2. 発表標題 福祉専門職教育における実習記録のICT活用に向けた課題 |
| 3. 学会等名 第46回教育システム情報学会全国大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 坂本毅啓・佐藤貴之・中原大介 |
| 2. 発表標題 ソーシャルワーク実習における実習記録のICT活用の検討 |
| 3. 学会等名 第47回教育システム情報学会全国大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|---|----|
| 研究分担者 | 中原 大介 (Nakahara Daisuke) (20461999) | 福山平成大学・福祉健康学部・教授 (35411) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 佐藤 貴之 (Sakamoto Takeharu) (90310979) | 北九州市立大学・基盤教育センター・教授 (27101) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |